



筆者編集による西夏文
『妙法蓮華經』写真版表紙

法華經を通しての「西夏語」研究

西田龍雄

貴東洋哲学研究所は1962年に創立され、明年に早や50周年を迎えられる由、誠に御目出度く、心よりご祝詞を申し上げます。私が貴研究所と初めて接しましたのは、1980年刊行の『続シルクロードと仏教文化』に拙文「西夏語仏典について」を執筆したときでした。その後、『法華經とシルクロード』展（ロシア・

西夏文妙法蓮華經』の刊行が実現するに至りました。

当初はさほど貴重とは感じなかったのですが、研究が進むにつれて西夏文法華經は西夏語の研究にとって欠かすことが出来ない、特に文法分析には最高の資料であると考えるようになりました。法華經の西夏文は各所に問題を含んで種々の観点から重要な研究対象となり、難解な

ところを秘めた未開拓の宝庫であります

た。拙文「西

東洋学研究所所蔵の
仏教文献遺産）でお
世話になり、20
05年には『ロシ
ア科学アカデミー
東洋学研究所所蔵

夏語研究と法華經」(i)〜(iv)を刊行していただき、のち別刷りまで作成いただいたことに深く感謝しています。西夏文法華經の日本語訳本は上巻のみに止って大変に心苦しく、草稿は手許にあるものの清書に至っていないのが現状です。残念ながら小生の寿命と比べて完成はむつかしいかも知れないと懸念しています。

拙文「西夏語研究と法華經」の中で、私は種々の面

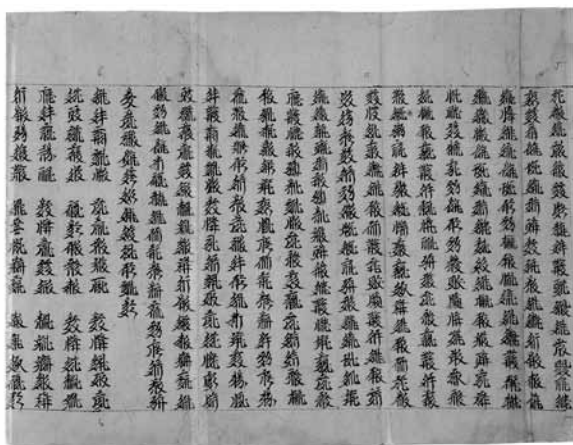
から考察して、西夏文字は複数の言語体系に対して考案されたものであったと結論せざるを得なくなりました。そして西夏語という書写語自体も均質的な性格を具えた体系ではなく、数種の部族語形の複合体もしくは混合体であったのではないかと考えるに至りました。

この文字の基本的特徴は早い段階で解明できました。象形字・指事字は全く存在しない。形声字と会意字を主体とする特異な発想から造られている。漢字からの類推では解き得ない複雑な字形網が本質であり、その字形網を支配する別の原則の存在に気がきました。

そしてこの西夏文字は意味情報のほかに文法情報をも伝達し得た、他に類例のない新しいタイプの優れた表意文字の傑作であると結論できました。

末筆ながら貴研究所のますますのご活動をお祈りいたします。

(にしだ たつお／京都大学名誉教授)



LS p. 228 / 26 p. 229 / 28

西夏文『妙法蓮華経』は鳩摩羅什による漢訳から11世紀に西夏語に翻訳された。この写真版では上部に西夏文、下部に漢訳を配し、対照させている

此子可憐、爲醫所中心信願、
得離苦海、求教、如老婦而不肯
服、我今欲方便令服此藥、即作是言、
汝等知我今言、惡惡時已、可、良藥乎
留在此、汝可服勿、藥、作、
已、能、使、
子、
國、自、思、
信、力、
已、
能、
此、
自、
無、
合、
而、